

# 『赤毛のアン』をめぐる言説配置

——九〇年代フェミニズム批評とバックラッシュ——

久米依子

はじめに

一九五二年に村岡花子の翻訳書が出て以来、『赤毛のアン』（原題『Anne of Green Gables』一九〇八）は日本の少女たちに愛読され、メディアミックス的受容や関連本多数の出版も経て、女性文化の一つのモデル（型）として定着した感がある。料理や手芸の本、舞台となった島の写真集など、多彩な情報を含めた「アン」シリーズ全体が親しまれているといえよう。

しかし一部でよく知られているように、『赤毛のアン』の英語圏での人気は必ずしも高くない。欧米圏での評価より、日本での知名度が高い作品はこれまでもあるが（『フランダーズの犬』など）、年々加熱するかに見える受容の広がりや高い価値付けは、かなり特異だといえよう。この（日本的受容）を取り巻く緒言説に注目し、戦後から現代に至る日本の社会・文化・メディア・ジェンダーの状況がいかに物語の受容に反映したか、特に九〇年代フェミニズム批評とその後の展開がはらむ問題点について、考察したいと思う。

一 戦後日本社会と『赤毛のアン』

——規範性とサブカルチャー化

『赤毛のアン』の日本での特別な人気は、九〇年代に国内外で注目され始めた。注目の直接の原因は関連書籍の出版が増え、また物語の舞台であるプリンス・エドワード島への日本人旅行者が飛躍的に増加したことによる。最近では減少し年平均一万人以下になったそうだが、九〇年代に島を訪れた日本人観光客は、最盛期には年間二万人近かったという。カナダ在住のライター梶原由佳は、当時カナダで何度も「日本人は、どうしてルーシー・モード・モンゴメリの『赤毛のアン』が好きなの？」と聞かれたという<sup>(1)</sup>。旅行者数だけでなく小倉千加子が指摘したように、「アン」シリーズは英語圏での総出版部数が三百万部と言われるのに対し、日本での総発行部数は一千万部を超え、「驚嘆」すべき数に至っていた<sup>(2)</sup>。斉藤美奈子はその状況をふまえ、「二〇世紀の初頭に書かれたカナダの家庭小説『赤毛のアン』が、なぜ戦後の日本でこんなに愛読され続けてきた（続けている）のかは、近代文学史上、もったも大きな謎のひとつです<sup>(3)</sup>」とまで述べた。海外の反応としてはカナダ人ダグラス・ボー

ルドウインの分析<sup>4)</sup>や、『The New Yorker』(一九九六・八)、『Canadian Children's Literature』(一九九八)などが日本人読者の熱烈な人気を取り上げている。

ただし現在から考えると日本での人気をことさら「謎」と見るこうした見解は、「アン」シリーズの読者を奇妙な、軽佻浮薄な存在として捉え、また英語圏より人気があることがあたかも間違った受容であるかのようなイメージを流布させた面がある。それが後述のフェミニズム批評の問題とも絡み、受容者の像にバイアスをかけることに繋がったようだ。

その経緯を見る前にまず、戦後日本で『赤毛のアン』の特別な人氣がどのように形成されてきたかを振り返ってみる。よく言われるのは、「アン」シリーズの人氣の高さは、訳者村岡花子の文の上手さに負うところが多いということだ。村岡花子は二十代の大正期から少女雑誌に寄稿し続け、日本の少女文化を知悉する翻訳者だった。『赤毛のアン』は少女アンの活発な言動をユーモラスに綴りつつ、アンとタイアナの深い友情を語り、抒情的な美しい自然描写も含むこれらはすべて、昭和戦前期の日本の少女小説と共通する。その上でアンが級友の少年と互角に成績を競うという、戦後日本にふさわしいエピソードも描かれていた。つまり日本の少女文化の一翼を担ってきた村岡が、日本の少女小説のパターンを備え、かつ、戦後の民主主義・男女共学社会に適した新しさも伴う物語を、読みやすいなめらかな訳で提供したのであり、女性読者に広く受け入れられる条件が揃っていた。

さらに、一般的児童書のレベルを超えるような価値付けがなされたことも見逃せない。村岡花子は原書との出会いについて以下のよ

うに回想している。「私が『アン・オブ・グリーン・ゲイブルズ』を読んだのは昭和一四年頃だったが、ミス・シヨーというカナダ人(中略)の寄贈本である。(中略)西欧諸国とのあいだがおだやかでなくなりかけた頃で、老年の彼女はカナダに帰ることになった。そのとき、私に手ずれた『アン・オブ・グリーン・ゲイブルズ』を残してくれた。(中略)空襲警報が出ると家じゅうの戸をしめて、外に洩れないようにおおいをした電灯のもとで訳しつづけた<sup>5)</sup>」

太平洋戦争が迫る中でやむなく帰国するカナダ人女性から原書を譲られ、空襲の恐怖の下で訳し続けたという語りによって、まさに戦争に抵抗する書物と翻訳であったかのような、ドラマティックな意味付けがなされる。このエピソードは孫の村岡恵理による評伝『アンのゆりかご』村岡花子の生涯(マガジンハウス、二〇〇八・六)でも強調され、それに基づくNHK連続テレビ小説『花子とアン』(二〇一四年上半期、脚本・中園ミホ)では、空襲下で村岡が原書と翻訳を死守する場面が山場になった。ただし実は、初めて『赤毛のアン』を読んだ時期については第一次大戦直後と述べた文もあり<sup>6)</sup>、やや疑義がある。しかしともかく村岡花子は、『赤毛のアン』が訳者の特別な経験と戦前からの時代性を負った書であるとアピールし、現在でもそこに価値が見出されているのである。

次に『赤毛のアン』の出版元三笠書房は、昭和十年代に教養叢書講座をいくつも出し、また『風と共に去りぬ』を日本で最初に出版した(一九三七)社としても有名だった。この社から出版されたことで、若い女性読者の教養書的な性質が示されたことになる。そして売り上げが良かったこともあり、同社の若草文庫に収められ、さらに五九年には同社の女性向き『世界若草文学全集』全三二巻の第

一回配本として、全集の目玉となった。ここで『ジェーン・エア』『天地』『狭き門』といった世界名作と肩を並べたのである。

いっぽう翻訳者村岡花子も、活躍の場を広げていく。小倉千加子が指摘するように、『赤毛のアン』出版前から村岡はすでに「親米、親キリスト教イデオログとして」<sup>7)</sup>発言し、戦後社会を担う女性知識人として公的な役割も増えていった。そうでありながら村岡は自らが家庭婦人であることを折につけ語り、服装は和服に徹した。『赤毛のアン』を解説した「緑の切妻屋根のアン 美しい心の少女」<sup>8)</sup>（『それいゆジュニア号』一号 一九五三・三）という文でも、「世界的の有名人になつたミス・モンゴメリはあつちこつちからの招待攻めに逢いました。けれどもみんなことわりました。たつた一人の祖母さんをのこしてはどこへも行きたくなかつたのです。（中略）相変らずお料理をしたり、洗濯をしたり、お皿洗いをしたり床こすりをしたりしていました」と、作者モンゴメリが家事にいそしむ質実な女性であつたことの素晴らしさを述べている。

そうした中で『赤毛のアン』の一部が、五〇年代から七〇年代にかけて、複数の中学校国語教科書に採用された。教育性の高い名作として公けに認知されたことになる。またこの教科書掲載により、男子学生にも知られるようになった。

こうして『赤毛のアン』は、戦後レジームにふさわしい価値を帯びていった。カナダ・メソジスト教会が設立した東洋英和女学校で英米文化を深く学び、多数の公的役職（文部省嘱託、日本翻訳家協会副会長、行政監察委員会委員など）に就いた村岡花子が、戦中に命がけて訳した、北米大陸の家庭生活を描く小説。それは反軍国主義的であり、親米的であり、パクス・アメリカーナにおいて必須の

教養や国際的女性モデルを教える。主人公アンの果敢な自己主張や男子少年と対等に渡り合う姿は、戦後民主主義・男女平等社会での教育的少女像ともなる。しかも原作者もアンも翻訳者も、堅実な良妻賢母像から逸脱せず、旧体制・旧秩序との連続性を保っていた。まさに『赤毛のアン』は、五〇年代から七〇年代にかけて、戦後日本社会の理想的・規範的な少女向きの書物となったのである。

しかしそれだけであれば、時代が変われば効力も薄れたはずだと考えられる。そこへ七〇代末、強烈なカンフル剤のような現象が起きた。いわゆる（メデアミックスの成功）である。まずはミュージカルが上演され（来日版一九七〇、劇団四季版八〇〜）、さらに全五〇回のテレビアニメ『世界名作劇場 赤毛のアン』（フジテレビ系）が七九年に一年間放映された。

このアニメーションは、のちにスタジオジブリで活躍する高畑勲が監督し、宮崎駿も一部を手伝った。美しい自然風景や人物の繊細な心理描写、洗練された音楽表現などで高く評価されている。監督のこだわりが随所に活かされ、回によっては原作よりも感動的な補強部分が加えられた。また高畑はのちのインタビューで、作るにあたって客観的に、主人公から距離をとって映像化したと述べている。<sup>9)</sup>その結果このアニメは、大人や男子の視聴者にも受け入れやすい作となり、『赤毛のアン』の知名度をさらに高めた。八〇年代はちょうど、日本のサブカルチャーの勢力が飛躍的に伸びる時期にあたるが、その直前に、『赤毛のアン』に新たな魅力が付け加えられたのである。

このアニメ化以後アンは、サブカルチャーのキャラクターのように愛されることになる。関連書籍も次々と出版され、プリンス・エ

ドワード島への旅情を誘う写真集などを含め、ヴィジュアル面を重視した書が数十冊刊行された。『世界名作劇場』でアニメ化された他の児童文学は、主人公がもっと幼かったり少年だったり旅ばかりしていたりするので、料理や手芸の本は展開しにくかった。その点『赤毛のアン』は、若い女性が手に取りたくなくなる関連本を出しやすかったといえる。八〇年代以降、女性に経済力がついたこともこれらの売り上げを伸ばし、島への観光客も増える結果となった。初めに紹介した日本での人気の高さの「謎」は、このアニメ化以降の現象として見るとかなり解明されるといえよう。

## 二 九〇年代フェミニズム批評と『赤毛のアン』

### ——補填と依存

しかし広範な人気を得て受容が活性化したのち、急に、作家やテクストに批判的なまなざしが注がれる時期が訪れる。五〇年代にいったん規範化され、八〇年代に大衆の人気を得たことで、九〇年代フェミニズム批評の恰好のターゲットとなるのである。

まず小倉千加子の論が衝撃を与える。九一年から雑誌『イマゴ』に連載された「アンの迷走——モンゴメリーと村岡花子<sup>10</sup>」で小倉は、『赤毛のアン』はアメリカではもはや忘れられ、日本人だけが有り難がっていると、プリンス・エドワード島で現地のガイドから聞いたモンゴメリの自殺の話も日本人は知らずにいると述べた。モンゴメリの自殺は、死後六〇年以上経った『赤毛のアン』出版百周年の二〇〇八年によく遺族が公表するまで、牧師の妻であったためか公けには伏せられていた。それを明言したのである。

この自殺説を核に小倉は、モンゴメリには「結婚への諦念とヒュ

プリンス（深い層での思い上がり）<sup>11</sup>」があり、「彼女は（中略）理想の牧師夫人を演じ、二人の男の子を育て、夫の鬱病を隠し、家族の名誉を守り、二流の作家となった<sup>12</sup>」と、夫の鬱病を世間に隠して偽善的な結婚生活を送った作家だと指摘した。また「モンゴメリーにとって、アンの収まるべきところは、家庭<sup>13</sup>」であって、そこに基盤を持たない少女の有り様などは想像することはできないのである<sup>13</sup>」と、作中のアンも偽りの理想的家庭婦人として描かれたと批判的に捉え、さらには翻訳者村岡花子も「妻が稼ぎ、夫がそのマネージメントをするという、当時にあつては変則的な夫婦の関係を隠蔽するかのように、積極的に夫を立て、夫唱婦隨を演じ<sup>14</sup>」たとした。「赤毛のアン」は、「子持ちの婦人型」の女性が最も幸福になれるという価値観の持ち主によつて創作され、同じ価値観の持ち主によつて訳された。／しかし、この（中略）タイプが、彼女たちが本当に目指していたものとは違う女性であったことにおいて、モンゴメリーと村岡花子は共通している<sup>15</sup>」

この連載は十年以上たって大幅に改稿の上単行本化され、その加筆部分で『赤毛のアン』の日本での人気の高さも次のように総括された。アンのように「結局はライバルである恋人と結婚し、（中略）平凡でも「幸福」な生活で補償する。（中略）『赤毛のアン』は、戦後から一九八〇年代半ばまでの日本人女性にとつて自分の「能力」の自己評価とそれに釣り合わない「地位」の落差を補填し、自己のありようを肯定するために、無意識に選ばれてきた読み物である。（中略）アイデンティティなど確立しなくてもいい、「自立」も「独立」もしなくてもいい。／「そのままのお前がいい」と肯定してくれる「故郷」（＝親）の理想的な姿が、『赤毛のアン』にはある」（第

## 8章 「ロマンチック」の呪縛

つまり結婚生活に疲弊し自殺したモンゴメリを、良妻賢母の生き方に抑圧されつつ規範的女性を描いた作家とみなし、アンを紹介した村岡花子も同様な良妻賢母型を演じたとする。そして日本の女性読者たちは、このような作家と訳者の手による、「才能」に見切りを付け家庭に入る女性（アン）を描く作品に未だ肯定されようとして自立できない人生の補填として『赤毛のアン』を読んでいる、と批評したのである。

これは女性の自立を阻む日本社会を糾弾し告発しようとする論ではあった。しかし作家の生涯とテクストの意義を直結させ、また日本人女性の現実的な課題から、否定すべきテクスト・主人公として『赤毛のアン』を捉えてしまった点には問題があったといえよう。とはいえモンゴメリ、アン、村岡花子、さらに日本人女性愛読者と日本社会までをあざやかに斬り、それまでにない視点をもたらした画期的な論であったことは間違いない。

こうしたフェミニズム批評が衝撃を与える時代にあつて、その後しばらく、小倉論と立場を同じくするような女性の論が続くことになる。まず作家松本侑子は、『赤毛のアン』を新たに翻訳した立場でありながら、九二年開始の連載エッセイ「アン・シャーリーの憂うつ、そして夢」で、「モンゴメリは（中略）男性優位社会におもねって、男社会が期待する少女像に沿った少女小説を描き続けた」と述べ、『赤毛のアン』は「家の存続のために、自己の夢をあきらめる若者の話である。アンが進学よりも「家」を守ることを選んだのは（中略）恩返しのためとも言える。けれど、「家」の犠牲になったことに変わりはない」と、やはり守旧的で抑圧的な面を論じた。

また新訳『赤毛のアン』（集英社、一九九三・四）の「訳者あとがき」では、モンゴメリは「男社会の秩序を乱す女らしくない作家、不道德な作家」という批判を恐れ、「女の真実を書けなかった卑小な自らへの絶望と悔い」の中で死んだ、と「男社会の秩序」に従ったモンゴメリとアン像の限界を指摘している。<sup>18</sup>

次に、英米児童文学研究者の横川寿美子の論集『赤毛のアン』の挑戦』（宝島社 一九九四・三）が刊行された。これも当時のフェミニズム批評に、ある程度コミットしているとみなせる。横川は、アンの世界は葛藤がなく、願望がスムーズに実現する物語であり、そのため少女が「確固たる自己を掲げ、それを主張することが広く是認される」社会になれば読まれなくなるかもしれない、と問い直す。<sup>19</sup>そして物語中でアンが安住する「女のユートピア」を、非現実的なファンタジーランドだと評した。しかし、この「女のユートピア」性などは、物語内でユートピアを読むことによつて読者は現実立ち向かう力を得る、といった方向で評価することもできたはずだが、当時はそのような捉え方は語りにならなかったようである。

さらにカナダ在住ライター梶原由佳も、『赤毛のアン』を書いたくなかつたモンゴメリ（青山出版社 二〇〇〇・四）の中で、手紙や評伝などから、モンゴメリの人生が抑圧の中で営まれたと検証した。ただし表題の「赤毛のアンを書きたくなかつた」という言葉は、モンゴメリが手紙の中で愚痴的に書いた言葉をやや過大に取り上げたものであるが、アンのお料理本やプリンズ・エドワード島の写真集などに心躍らせるファンに対し、インパクトを与えるべく選ばれた表現であつたようだ。

以上のように九〇年代以降、女性の評論家、作家、研究者らに

よって、不幸な結婚を隠したモンゴメリの人生が批判的に見直され、彼女が描いた女性像も時代遅れではないかと問われた。またその物語に囚われ依存するように見える日本人愛読者たちにも、疑問が呈されたのである。もちろんこれらは、女性読者の覚醒を願うフェミニズムの立場からなされた主張だが、今日から見れば、狭隘な面があったといえよう。作家自身の不幸や自殺とテクストの評価を直に繋げるような本質主義的な見方がなされ、読者に関しても、欧米の女性と比べて進んでいる／遅れているという、女性を分断化し空間的・時間的に序列化・階層化する考察がなされてしまった。また『赤毛のアン』以後の、「アン」シリーズ中のフェミニズム的に評価できる要素——アンがいったん諦めた大学に進学し中学の校長にまでなる点、結婚後も地域社会で活躍する点、中高年女性やオールドミスの多様な生き方が魅力的に描かれ、女性コミュニティの豊かさを示した点——なども軽視された。それらは裏返されて、次なる読みの問題を生みだしていくことになる。

### 三 男性論者による再評価——ゼロ年代の「幸福」論

ゼロ年代には、九〇年代の批判を丁度逆転させるように、日本の男たちがアンを同様の観点から肯定し、〈逆襲的〉に語る時代が訪れる。いわば反動期の始まりである。

まず評論家小谷野敦が、自身も『赤毛のアン』のファンであり、小倉千加子の連載を熱心に読んだと述べながら、以下のように語った。「私は大学や大学院で出会った女性たちの口から、「アン」が好きだとか、いわんや熱狂的なファンだとかいう話を聞いたことがあまりない。「アン」人気を支えているのは、こういう超エリート女

性たちではなく、二、三流の大学や短大を出た程度の、どちらかといえはおとなしめの女性たちだというのが私の印象だ。(中略) アンが教師として働いた後に通うレドモンド大学も(中略)日本では、地方の高校で上から五番目くらいの成績の女の子が二流どころの大学へ進むようなものであり、実際に「アン」の人気を支えているのは、こうした階層の女性たちなのだ」

小谷野によればアンを好きな女性たちは、才能も技能もそれへの執着もない「飛べないアヒル」のような存在で、「自己実現」などとは無縁であり、そういう人の避難所が『赤毛のアン』なのだという。また「何ら確証はない」と断りつつも、モンゴメリの夫が重い鬱病になったのは、妻が作家として成功したためではないかとも述べた。

これは「自己実現」などできない女性を『赤毛のアン』が支えている、という見解であり、またモンゴメリの夫の病氣も妻の成功によると見て、女性の「自己実現」の可能性や、その「イデオロギー」性を懐疑する論と考えられる。

しかし夫の鬱病に関しては、すでにモンゴメリの研究では一様に、夫が結婚前から鬱傾向にあり、その原因は宗教的な信念によるもので、妻の活動とは無関係に進行したと判断されている。そうした書籍が既に幾冊か出ていたが、それらに注目せずに論が進められている。また学歴云々に関しては、小谷野自身も十年後、「その後、一回り年上の東大出身の美しい女性から、『赤毛のアン』が好きだったと聞かされた。(中略)どうやら一回り上には、文学好きな高学歴女性というのがいたらしい」と、自らの意見を修正している。

ともあれ小谷野論は、小倉千加子らが批判した『赤毛のアン』の

非自立的傾向を逆に肯定し、読者をそこに留まらうとする人々を見る。九〇年代フェミニズムが批判した点に、むしろ多くの女性の取るべき生き方が表されているのではないかと示唆したのである。

続いて大塚英志は『物語消滅論』（角川書店、二〇〇四・一〇）で、ネット上のトラブルで同級生を学校で刺殺した佐世保の小学六年生の加害女兒が、少年鑑別所で『赤毛のアン』を読みふけた」という情報<sup>23</sup>に即し、「もう少し早く『アン』に出会えばよかった」と思います。（中略）『赤毛のアン』ほど戦後の日本女性の自我形成に寄与した小説はないのです」と、「日本女性」にとつての『赤毛のアン』の特殊性を示した。佐世保の加害女兒は事件前、高見広春『パトル・ロワイアル』（太田出版、一九九九・四、幻冬舎文庫版、二〇〇二・八）を愛読していたが、そのようなサブカル本ではなく、『赤毛のアン』が必要だったと説いたのである。おそらくこれは先述した、同じ二〇〇四年に出版された小倉千加子『赤毛のアン』の秘密<sup>24</sup>が、日本女性は自立できない人生の補填のためアンを読む、と批判的に捉えていたのと、ちょうど逆方向から評価したものと思われる。大塚はこの時期、近代的個人の（私）を仮構するには文学が必要だとしきりに主張し、その観点に沿って「日本女性」と『赤毛のアン』の関係も捉えたと考えられるが、この評価はむしろ、「日本女性」をある型にはめる素材として『赤毛のアン』の有用性を語っている。フェミニズム批評はここでも裏返されようとしているのである。

さらに英文学者の山本史郎は『東大の教室で『赤毛のアン』を読む 英文学を遊ぶ9章』（東京大学出版会、二〇〇八・一二）という本で、村岡花子訳の『赤毛のアン』では、アンの親代わりであるマシユウとマリラ兄妹の兄のマシユウが死に、マリラとアンが慰め合う場面

において、マリラのセリフが省略されていることを取り上げた。そして村岡訳ではマリラが「おっかないおばあさん」という「類型」に仕立てられているので、マリラの人柄が変わるような心弱いセリフをしゃべらせることができなかったのだろうと論じた。

しかしこれは実は、山本本人も「わたしの想像にすぎない」と述べているように、何の根拠もない推論である。村岡訳の省略については出版の際のページ数調節のためではないか、などの見解があり、また省略されたセリフがなくてもマリラの心中の変化は他の場面から充分理解できる、と言われている。しかし山本は、村岡が登場人物像の固定化のために重要なセリフを削ったと断定し、かつその「自分の想像のなか」の悩める村岡花子像を「たまらなくいとおい」い、などと評している。この評価は「東大」で『赤毛のアン』を読む、という権威化された姿勢から生まれていると思われる。ここでも『赤毛のアン』を読むのになぜか学歴が示され、その序列の中でアンを語る地位が確保される。そして最高学府の立場から、女性翻訳家の力量不足を指摘し、読者を啓蒙する。この点で、一連の男性が語る『赤毛のアン』問題と、ベクトルを共有している本だと考えられる。

そして最も問題をはらむと思われるのが、新たなアン・ブームを牽引したと言われる、脳科学者茂木健一郎の本である。茂木がアンの大ファンだと公言した後、プリンス・エドワード島を訪れる日本人男性観光客が増えたと言われるほど、影響力があったとされる。

その茂木の『赤毛のアンに学ぶ幸福になる方法』（講談社文庫、二〇〇八・一二）は、少年時代にアンに夢中になり、高校時代に原書でシリーズを全部読破し、幸福になる方法を学んだという話から始

まる。その方法とは「役に立つかどうか」の価値基準などで人をはからず、幸福を「個人の主観」と捉えることにあるという。つまり人がどう思おうと自分は幸せだと思え、それを想像力豊かなアンの生き方から学べる、というのである。そのように「幸福」を定めてから茂木は、以下のように、思いの外に保守的なジェンダー観・社会観を述べていく。とても「個人の主観」の自由を尊重するような意見には見えない。

まず、「脳の中には過去の歴史が履歴となつて蓄積されている」から、過去「何千年と積み重ねてきた男女の役割の違いというのは、時代が変わつたからといって即座に変更できるものではない」とし、「男は外で戦い、女性は次の世代を担う生命を育む。(中略)脳に組み込まれた過去の履歴に従つて、今もそれぞれが行動している傾向がある。そしてその際に、女性は外見が自分の立場を左右しようということを、どうしても経験として持っている」と主張する。そのように女性は外見で立場が左右されるとしながら、アンの赤毛については、別に赤毛のどこが悪く、他の人が「どう思うかということ」は「書かれていないので、アンの外見的劣等感」は「主観的なもの」に過ぎず、ありのままの自分らしさと和解できるはずだ、と論じている。

ここには二つの問題がある。まず男女の役割が、文化として継統されてきたというならまだしも、脳に刻み込まれていると言うのだから、個人で変更できない生物的決定項だと思わせる。従つて男性のために女性が外見を気にするのも不変の原則ということになる。しかもそう語りながら、外見の劣等感の主観的なもので、自分と和解しろとも言う。女性は外見を気にせよ、しかしそれで悩むのは自

分のせいだ、という話になつていく。一種の自己責任論といえよう。ただしこの赤毛の話は、西欧社会における赤毛の意味を全く理解していない、無責任な発言である。アンが赤毛を気にしたのは西欧の文化的・社会的文脈に則り、赤毛を異端視する歴史をふまえてのこと<sup>24</sup>で、決して自分の主観で勝手に悩んだわけではない。それを、悩み傷つくのは自分のせいだとして、あなたが不幸なのは社会のせいではない、自分の主観を変えなさい、と勧めているのである。

次に茂木はモンゴメリの「エミリー」シリーズの、作家になろうと努力するエミリーとアンとを比べ、欧米で人気があるエミリーよりも、家庭を大事にするアンの生き方を勧め、それが戦後日本女性の理想の生き方だ、正解だ、日本の男性にとつての好みだ、とたたみかけていく。「いろいろ選択肢はあつても、やっぱりアンみたいな生き方が正解なのだ。(中略)おそらく多くの日本の男性にとつて、エミリーのような人物は、あんまり好みではないだろうということだ。(中略)男性がどういう文化を形成しているかで、その国の全体的な文化像も見えてきます。女性の生き方のロールモデルを考察する上では、必ずもう一方の男性の生き方というの併せて考えていかななくてはならないのです」

ソフトな語り口であるが、既存文化や男女の階層差、男性の女性観などの現状を受け入れ、内面化せよ、と指導しているといえよう。しかも「等身大の自分」の運命を受け入れて「幸福を目指」せとも語るので、日本女性として「運命」に従い、社会も男性も何も変えることなく、自分の心もちの方を変えて明るく幸せに生きよう、と提言していることになる。

続く「赤毛のアンが教えてくれた大切なこと」(P.H.P.研究所、二



〇一三・三三)で茂木は、アンのような幸せを手にするためには「あきらめないで毎日をちゃんと生き」ることが大切だが、その上で「大学進学をあきらめた」アンを見習いなさい、と語る。というのも「アンが幸せになれたのは、自分の夢をあきらめなかつたこと、それと同時に自分に起こった運命を受け入れることができたから」である。あきらめないで頑張つたあと、運命を受け入れれば幸せになれる——。それなら初めからあきらめても良さそうなものだが、若者が最初からすべてあきらめていては秩序も制度も維持できないだろうし、彼らに、運命を受け入れる前にしばらくはあきらめず励みなさい、と言う必要があるのだろう。

そしてこの本の本論最終部分では、「平凡な生活の中に、本当の喜びがあるのだ」から、「偏差値の高い学校に入らなければ、あるいは社会的に認められなければ、幸せになれないと思ひ込むことはない」と言い切っている。またしても学歴的な話が出て、偏差値は低いままでよい、と教え、「平凡」な人生に留まるよう教示して締め括られたのである。おそらく著者は、こうした言説の抑圧の強さに気づいていないのだろう。

#### 四 新たな読みのために——バックラッシュを超えて

このような男性たちの論は、小倉論の批判した、能力を認められずに「平凡」な「幸福」で補填されようとする日本人女性を「赤毛のアン」が「そのままでもいい」と肯定してしまうという点、あるいは松本梢子の指摘する、「男社会が期待する少女像」への「誘導と封じ込め」という面を、そっくりそのまま転倒させ、熱く賞賛しているといえよう。自己実現も、運命に抗う夢も、社会的成功も不要

であり、従順な主体となり、既存社会と「平凡な生活」を受け入れることが幸せだと教え、その最適のテキストとして『赤毛のアン』が称えられる。これらはいうまでもなく、為政者や秩序の側、階層が上の立場の者にとつて、大変都合のいい理論になっている。

どうしてこんなことになったものかと少し暗澹とさせられるが、とりあえず言えることは、ソフトな装いをとつたバックラッシュの波がゼロ年代に起きていたという事実、そして九〇年代フェミニズムの戦略ミスのな部分を、やはり認めるべきだろうということである。九〇年代フェミニズム批評としての小倉論が、日本人女性は古臭いアンなど読んでいる、と女性を分断し階層化し、また人気テキストを教条主義的に批判したこと。そのやり方では、批評の有効性が十年もたなかつたということになる。批判は転倒され、マジョリテイの側に立つ装いで、より強烈に性差の秩序(ジェンダー)が、アンに事寄せて強要されたことを記憶するべきだと思われる。

では再稼働する抑圧、強化されていくジェンダーの規範に、いかに対抗すべきか。現在到来している新たなアン・ブームは救いになるだろうか。

前出の、孫の村岡恵理による『アンゆりかご 村岡花子の生涯』

は、村岡花子が女学校の給費生という経済的に恵まれない立場から、苦勞を重ねて家庭をもち、作家・翻訳家として成功する軌跡を追っている。それは『赤毛のアン』で孤児のアンが、地域の人々に愛される良き妻・母として成長する姿と重なり合う。ただしアンがカナダの一地方プリンス・エドワード島で終始暮らしたのとは異なり、村岡花子は文壇に迎えられ、ラジオ放送も担当し、戦後は様々な公的役割を担い、まさに中央で立身出世する。その点でアンと共通し

つつアンを超える、今日的な女性の自己実現のモデルとなると考えられる。ただしそれはまた一方で、翻訳者の神話化を進めることでもあり、新たな陥穽に陥る危険性もある。

また『アンゆりかご』を原案とした二〇一四年上半期の連続テレビ小説『花子とアン』は、村岡花子を実際よりも貧しい育ちに設定し、「必死に夢を見」て格差社会を生き抜く花子の姿を描いた。階層を上昇して幸せをつかもう、それが家族のためにもなる、というメッセージを広範囲の視聴者に向けて発し、高い視聴率を得たのであり、バックラッシュ状況を乗り越える表象となったと見ることもできる。しかし、実話の装いをとったかなり捏造的なドラマでもあるので、これも神話化による落とし穴や、ジェンダー制度を補強する面を備えている可能性はある。

そうした中で今後の〈読み〉の可能性はどう開かれ得るのか。まずはテクスト・作家・読者、どれも一面的に捉えて断罪せず、多様な要素を見出すことが最低限の前提になろう。テクストや読者の一枚岩でない多様性を、常に確認すべきだと考える。

その上でバラバラに散逸してしまふ多様性ではなく、ある強度をもって読みの多様性の意義を示すことが、批評の課題となる。そのためには、時代の位相の中で〈アンを読む私たち〉をいかに語るかが、一つの立脚点となろう。論客に語られるばかりだった対象としての読者像を、〈私たち〉の像として取り戻すこと。その中で〈私たち〉にとつてのテクストの意味も、受容の方法も刷新してみせること。それは『赤毛のアン』に限らず、サブカルチャーなどを分析する場合においても、取り組まねばならない試みに他ならない。時代のイデオロギーの規制に吞みこまれず、テクスト受容から見出せ

る裂け目を絶えず追求する——。カノンの名作も、そこで新たな相貌を見せるはずである。『赤毛のアン』はこうした受容の問題をわれわれに突きつける、極めて今日的なテクストなのである。

注(1) 梶原由佳『赤毛のアン』を書きたくなかったモンゴメリ 青山出版社、二〇〇〇・四。

(2) 小倉千加子「アン迷走——モンゴメリと村岡花子・1 アンへの助走」『イマゴ』一九九一・五。

(3) 斎藤美奈子「編者から読者へ 性と批評が出会うとき」斎藤美奈子編『男女という制度——21世紀文学の創造7』岩波書店、二〇〇一・一一。

(4) タグラス・ポールドウィン、木村和男訳『赤毛のアン』の島——プリンスエドワード島の歴史 河出書房新社、一九九五・六。

(5) 村岡花子「赤毛のアン」一九六四・一一。村岡花子遺稿集『生きるということ』所収、あすなろ書房、一九六九・一一。

(6) 村岡花子「赤毛のアン」への招待『世界若草文学全集』版『赤毛のアン』所収、三笠書房、一九五九・四。「わたくしがこの本を初めて読みましたのは、もうずいぶん以前のことです。第一次世界大戦の直後のころだったでしょうか」とある。

(7) 小倉千加子「戦後日本と『赤毛のアン』」注(3)前掲書所収。

(8) 光村図書『中等新国語二』一九五九・六二、『中等新国語一』一九七二・七七、三省堂『中等国語二』一九六二、『新国語一』一九六二。

(9) 高畑勲(インタビュ)「赤毛のアン」制作の全貌に迫る 高畑勲「映画を作りながら考えたこと」所収、徳間書店、一九九一・八。および「赤毛のアン」スタッフ・インタビュ——監督・高畑勲『世界名作劇場「赤毛のアン」メモリアルアルバム』所収、徳間書店、二〇〇五・一〇。

- (10) 小倉千加子「アンの迷走——モンゴメリーと村岡花子」『イマージ』一九九一・五〜九三・一。
- (11) 注(10)前掲連載第五回「ギルバート症候群」『イマージ』一九九一・九。
- (12) 注(10)前掲連載第六回「家なる天使」『イマージ』一九九一・一一。
- (13) 注(10)前掲連載第一一回「二重底の箱」『イマージ』一九九二・六。
- (14) 注(10)前掲連載第一五回「隠された刃」『イマージ』一九九二・一一。
- (15) 注(14)前掲に同じ。
- (16) 小倉千加子『赤毛のアン』の秘密』岩波書店、二〇〇四・三。
- (17) 松本侑子「アン・シャーリーの憂うつ、そして夢」『すばる』一九九二・五〜一九九三・一一。
- (18) ただしその後、松本侑子は次々とアン関連の書籍を出版し、朗読会を行い、講演をし、さらに近年はプリンス・エドワード島への観光ツアーを毎年企画している。今やアンとモンゴメリの伝道者となつていて、いつても過言ではない。松本なりに、偽りのペールをはがした真実のアンとモンゴメリの姿、たとえばシェイクスピアなどの古典がきちんと作品のベースにあることなど、大衆的人気の中で見失われがちな文学性を伝えることに使命感を覚えるようになったようである。
- (19) この論自体は、小倉論より以前（一九八八―八九）に書かれている。
- (20) 小谷野敦「実現すべき自己などない時——ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』」初出『ユリイカ』二〇〇一・九、『聖母のいない国』所収、青土社、二〇〇二・五。
- (21) 例えばモリー・ギレン、宮武潤三・順子訳『運命の紡ぎ車』L・M・モンゴメリの生涯』（篠崎書林、一九七九・一二）および、メアリー・ルビオ、エリザベス・ウォーターストーン、横朝子訳『シリーズ（生き方の研究）（赤毛のアン）の素顔』L・M・モンゴメリ』（ほるぷ出版、一九九六・三）など。後書に夫の「ユーアンはだんだんとひどい鬱状態を示し、自分は永劫に罰を受けるべく呪われていると信じこんでしまっ

- た。特にどの罪のためといたうのでなく、カルヴィニズム神学の子定説では、ある特定の人々は死後の地獄行きが決められており、良い行いもこれを变えられないとしていた」（22 ユーアンの最初の挫折」とある。
- (22) 小谷野敦「高畑勲の世界」青土社、二〇一三・三「第四章『コナン』と『赤毛のアン』」
- (23) ただしこの情報の出典を、大塚は明らかにしていない。事件そのものは二〇〇四年六月に起きた。
- (24) 高橋裕子「世紀末の赤毛連盟」象徴としての髪」（岩波書店、一九九六・三）などに詳しい。
- (25) 原題『Emily of New Moon』以下の三部作。一九二二―二七年刊。
- (26) 松本侑子「訳者あとがき」L・M・モンゴメリ、松本侑子訳『赤毛のアン』所収、集英社、一九九三・四。
- (27) 「ひと 中園ミホさん NHKの連続テレビ小説「花子とアン」の脚本を書く」（文・赤田康和）『朝日新聞』二〇一四・三・二八。
- (28) 越智博美は、『赤毛のアン』そのものよりも、「良妻賢母像」に「同化しうるように自己成型を促すジェンダー規範こそが」問題だと指摘している。（越智博美「戦後少女の本棚」第二次大戦後の文化占領と翻訳文学」竹村和子編著『ジェンダー研究のフロンティア5 欲望・暴力のレジーム』所収、作品社、二〇〇八・二）。

〔付記〕 本稿は日本近代文学会二〇一四年五月春季大会でのパネル発表を修正したものである。パネル発表に参加した川端有子氏と吉田司雄氏からは有益な助言を多々頂き、運営委員の武内佳代氏や会場からも刺激的な意見を頂いた。記して感謝申し上げる。